映画字幕制作を用いた語学教育の可能性と課題

熊　木　　勉*

1. はじめに

福岡大学人文学部東アジア地域言語学科[1]では、現在、中国・韓国の古い映画を主たる対象として学生たちに字幕を作成させる作業を行っている[2]。韓国映画について言えば、この作業により、4回の成果上映会を行った。本稿では、これまでの作業を通じて見えてきた語学教育としての字幕作成の有効性と課題を整理、検討してみることにしたい。従来の研究において、映画（画像･音声･字幕の利用）を用いた授業の報告や分析などはそれなりになされているものの、映画字幕を「作成」するという視点からの研究はまだ緒についたばかりではないかと思われる[3]。もとより、字幕を作成するという作業には、費用的にも時間的にもそれなりの負担が発生する。まだ試みの域を脱することはできないが、

* 福岡大学人文学部教授

[1] 以下「本学科」とする。

[2] 本学科の中国コースでは2007年から授業の一環で字幕制作作業が試みられており、中国コースと韓国コースがともにそろって字幕を作成し、アジアフォーカス・福岡国際映画祭協賛企画およびアジアマンス登録事業として一般向けの上映会を行うようになったのは2009年からのことである。以来、毎年、学生たちが中心となって字幕をつけた中国と韓国の映画をアジアフォーカスで上映しており、これらは次第に作品が蓄積されてきたことから、「七隈映画祭」の名で、福岡大学のメディカルホールを利用して別途学科行事として映画上映会も開催し始めた。2012年度に2度目の映画祭が行われた。

[3] 字幕を利用した語学教育に関する論文は複数存在するが、字幕作成を通じた教育効果の検討は主として中国語教育の視点から間（2008a, 2008b）、間ほか（2012）によってな

語学教育という視点からより効率的な作業を目指すためにどのような取り組みを目指すべきか、負担と効率のバランスまでも念頭に置き、これまでの作業の蓄積を土台としつつ検討を行ってみたい。

2. 実践経過

まずは本学科韓国コースで行ってきた字幕制作作業の経緯を簡単に紹介しておくことにする。本学科で字幕をつけた映画は、アジアフォーカス・福岡国際映画祭の協賛を受けて一般向けに上映会を行っている。これまで上映された映画は以下の通り。すべて福岡天神エルガーラホール中（多目的）ホールで上映、入場無料、諸費用については福岡大学より支援[4]を受けた。

2−1 上映会［アジアフォーカス協賛事業分[5]］

1. 2009 年 9 月 22 日（火・祝）韓瀅模監督『青春双曲線』（1956 年）［中国映画：王濱監督『白毛女』（1950 年）］、入場者数のべ[6] 244 名（スタッフ含まず）
2. 2010 年 9 月 23 日（木・祝）李奉来監督『三等課長』（1961 年）［中国映画：魯韌監督『李双双』（1962 年）］、入場者数のべ 156 名（同上）

されている。また、本学科の取り組みを紹介すべく、李秀炅他（2010）の研究ノートもあり、間・熊木（2011, 2012）ではアジアフォーカスでの映画上映会の報告を行っている。福岡大学人文学部東アジア地域言語学科（2010）より報告書も出された。また、筆者が確認している範囲では、学生の語学教育活動に字幕制作を取り入れている韓国・朝鮮語関係の教育機関としては、大分県立芸術文化短期大学の下川正晴教授の取り組みをあげられるのではないかと思われる。他言語でも同様の試みがある。

[4] 第 1 回目は福岡大学「特色ある教育」に採択され助成を受け、第 2 回目は人文学部からの協力を得ることができた。第 3 回目、第 4 回目は福岡大学「魅力ある学士課程教育支援」に採択され、本学科の教育的取組み（学科行事）すべてについて助成を受けた。

[5] ほかに「七隈映画祭」と名づけて映画の上映会を行っており、さらに中国コースにおいては授業の中でも課題として取り入れているがそれについてはここでは大きくは触れない。

[6] ここで「のべ」とするのは、この数字が中国映画と韓国映画をご覧になられた一般の方を合計したものであるためで、2 編の映画を続けてご覧になられた方を考慮すると、実数はこの数よりも少ないことになる。

3. 2011年9月25日（日）韓瀅模監督『運命の手（운명의 손）』（1954年）［中国映画：魯韌監督『本日非番（今天我休息）』（1959年）：2009年度『白毛女』再上映］、入場者のべ119名（同上）
4. 2012年9月29日（土）高英男監督『通り雨（소나기）』（1978年）［中国映画：村の若者たち（我們村裡的年軽人）］入場者のべ164名（同上）

2—2 作業の流れ

a）機材

機材については、李秀炅ほか（2010：40-42）の甲斐教授の説明に詳しい。以下、ごく簡単に要点のみを記しておく。

本学科では、字幕作成にあたり、字幕ソフトとして株式会社カンバスの『SSTG1』を使用している。このソフトは、易しく字幕をつけることのできる簡便さと高性能の機能を併せ持つところに特徴がある。まず、このソフトはDVD画像を直接に読み込むことができないので、映像をDVDからmpeg1もしくはwmvファイルに変換しなければならない。エンコード作業についてはフリーソフトや安価なファイル転換ソフトを用いているが、字幕作業そのものは、SSTG1を使うのが便利である。字幕の縦書き・横書き・位置調整はもちろん、文字入力でのルビの挿入、斜体・傍点の利用なども可能である。同じく字幕を作ることができるソフトとしてはwindowsムービーメーカーがあるが、使いやすさではSSTG1が優れている。

このソフトは大きく分けて単機版とアカデミック版がある。単機版は2007年に購入した時は1機431,800円、2009年に3機導入した時は1機につき294,000円であった。これにバージョンアップにも対応する有料のユーザーズサポートが各機に必要である。アカデミック版は1ライセンスにつき1年で13,500円、初回のみドングル保証費として1機1万円の費用が必要である。授業では20ライセンスを取り入れている。単機版とアカデミック版に互換性

はない。上映会をするにあたっては、PC からそのまま全画面表示で上映するか DVD に焼いて上映することになるが、じつは単機版・アカデミック版ともにそのままでは焼き付けができない。できあがった字幕は、カンバス社に画像に貼り付け可能な形式へのデータ変換を依頼することとなる。

2011 年から本学科ではデータ変換が可能なドングルを 1 機導入し、作成した字幕ファイルを直接データ変換、アドビ社のプレミアプロで映像に字幕を貼り付ける作業を行っている。データ変換が可能なドングルを導入できたことで字幕作業は授業での成果物作成、上映会準備などの時間効率において飛躍的にやりやすくなった面がある[7]。

b）作業

字幕制作作業の流れは、韓国コースでは現在のところ、試行錯誤の連続である。教員の負担の問題もある。時間的にどうしてもできる作業が限られている。1 年目から 3 年目までは熊木が担当し、4 年目は本学科の広瀬貞三教授が担当した。1 年目から 3 年目までの作業の流れを簡単に記しておくことにする。

［1 年目］

1 年目に行った作業として、まずは筆者が DVD（『青春双曲線』）を選定、台詞をすべてエクセルに書き出し、それを字幕作業に参加する有志に配り、それぞれに担当の場所を決めて翻訳させ、さらに毎週、その翻訳を土台としつつ、実際に字幕を付ける作業へと入った。あらかじめ映画上映も行ったが、やはり学生たちに聞き取りは難しく、あくまでストーリーの大まかな流れを押さえる程度にとどまったようである。2 年生から 4 年生までのべ 9 人の学生が作業を

[7] いささか細かいことであるが、中国コースでは、字幕を入れる際には可能な範囲でインターネットなどで入手可能なフリーフォントを用いることにしている。念のために文字（フォント）の著作権を意識してのことである。韓国コースでは便宜上、既存のマイクロソフト社のフォントを用いた。

行い、ネーティブのアシスタントとして外国語講師の李秀炅先生の御協力を得た。9人の参加者とはいえ、あくまで課外に有志が集まる形であったため、実際には毎回3～4名程度の学生が入れ替わりつつ参加して、表現について討論を加えながら字幕をつけて行き、最終的には夏休みに合宿を行い、ここでパンフレットも作り、最終字幕を完成させる形をとった。4月から毎週作業を行い、夏休みの合宿を経て9月に完成したことになる。概ね週1～2コマを字幕作業にあてた。

［2年目］

2年目の作品『三等課長』は台詞の数が多く、一旦エクセルファイルに入力した台詞を翻訳して字幕用のことばに変えていく手順を踏むよりは、時間効率を優先し、一度上映会をしたうえで、毎週学生たちと映像を観ながら直接に字幕をつけていく形を取った。SSTG1には原語を記すスペースもあるので、そこに筆者が台詞を打ち込んでおき、さらにスポッティングもあらかじめ筆者が準備して、学生たちは字幕作業に集中できるようにした。台詞の打ち込み、スポッティングについては、単純作業であるので1年目および3年目も同様に筆者が準備した。学生たちは画面と原語を対照しながら適切な表現を探すこととなる。3年生、4年生、留学生（1名）まで含めてのべ10人の学生が参加した。4月から毎週2コマを字幕作業にあて、李秀炅先生の御協力も得て、2教室を確保して、別々に熊木・李が分かれて指導にあたった。1回集まるたびに、それぞれ約10分間の映像に字幕を付ける形をとり[8]、ともにできあがったところでその分を通して見るなどした。それぞれ他方のグループの字幕はあとになって見るわけであるが、それはチェック機能の意味もあり、各グループが自らが

[8] 3～4人程度の学生で話し合い、90分でできる字幕は大体映画10分ぶん弱であった。それをさらにグループが合同で検討するのに90分はかかる。結局、2コマ（180分）でおおむね15分程度の映像に字幕を付けるペースとなるわけである。実際には場面によって進み具合が大幅に異なる。

担当した部分の台詞をあらためて吟味する上でも合理的な面があったように思われる。

［3 年目］

この年は、映画『運命の手』の台詞が少なかったことと[9]、映画字幕作成の有志が思ったように集まらず、台詞の入力とスポッティングは例年通り筆者が準備し、筆者の演習科目で 2 度、字幕作成を実践する実習授業を行い、さらに有志 2 名に筆者の研究室でまとめて字幕をつけてもらった。しかし、やはり話し合ってしっかりと検討した字幕ではなかったので、かなり不十分な点が見受けられた。結局、夏休みの合宿を用いて、これをあくまで下訳と考え、大幅に変更を加えてあらたに字幕を作り直した。合宿に参加したのは教員として熊木・李のほか、学生は 3 年生と 4 年生の合計 3 名であった。台詞が多くなかっただけに、合宿で何とか対応が間に合った。少ない人数ながらもにぎやかに意見を交わし、映画の魅力までも含めて意見交換するなど、参加した学生には有意義な時間になったように思われる。

c）上映

上映会にあたって気づいたことなどに簡単に触れておくことにする[10]。

福岡天神エルガーラホール中（多目的）ホールの問題として、毎年空調の調節が難しいこと、床がフラットであるため、前の人の頭で、スクリーンの下のほうにくる字幕が見づらいという課題があった。これに対し、空調ははやめはやめに担当の方への調節依頼を行うこと、スクリーンの見づらさは椅子を固定

---

[9] 1 文を複数の「箱書き」で分けたり、複数の発話を 1 行に収めたりするので、「箱」の数がセンテンスの数にそのまま一致するものではないが、スポッティング（「箱わり」）した数は『青春双曲線』が 911、『三等課長』が 1918、『運命の手』が 403 であった。

[10] 詳しくは間・熊木（2011・2012）参照。

連結式ではなく一脚ずつ自由に動かせる形をとるなど、毎年、工夫を繰り返している。上映はPCからプロジェクターを通じて映写するが、プロジェクターの近くで発生する雑音も注意が必要である。上映する立場である教員の側からすると、何より、パソコンがフリーズする事態をもっとも恐れた[11]。また、DVDに焼き付けた映像であればほぼ安定しているが、2012年度の韓国映画はワイドスクリーンであった関係から焼き付けの方法が把握できず、DVD作成が間に合わなかった。SSTG1の全画面表示をそのままスクリーンに投影してご覧いただく形となったが、幸い、フリーズなどの最悪の事態は避けられた。上映会には常に一定の緊張感がつきまとう。

3. 字幕作業の実際

映画字幕作成作業を行いながら重要なポイントとなるのは、1）字幕の持つ特性である文字数制限から省略を果敢に行わなければならず、日本語表現に相当に頭を働かせる必要が生じる（適切かつ簡潔な訳）、2）何度も映像を繰り返し再生し、学生たちにその台詞と場面を総合的に理解させつつ適切な日本語をあてさせる（状況に応じた表現への気づきと習熟）、3）字幕は学生の発想をできるだけ尊重、教員は可能な限り口を挟まない（学生の自主性の確保）、4）文化的背景・社会的背景・特殊なことばなどについては教員が積極的に発言し、学生たちの映像や台詞への理解を深めさせる（映画に関連した様々な理解）、などを考えることができそうである。しかし、実際のところは台詞と学生たちの表現に違和感が発生することがしばしばある。最終的には教員が再度訂正を要求したり、教員としての意見を提示することも決して少なくはない。

[11] PCの故障などに備え、予備PCはつねに2台は準備している。

4. 語学教育としての可能性と課題

間は、福岡大学人文学部東アジア地域言語学科（2010）において、中国映画に字幕をつけた試みに基づき、作業を通して次のような語学的な訓練がなされるとしている[12]。

①映画の台詞を聞き取る（リスニング）。

②映画の台詞を読んで理解する（読解力）。

③映画の台詞の要点を簡潔な日本語で表現する（翻訳力）。

間の取り組みでは、文字起こしされた台詞があらかじめ準備され、学生がそれを翻訳していく作業を取る。「中国語環境のない日本で聞き取りの力を高めるためには、最初に文字を追いながら中国語を聞いて中国語の音を「意味のある言葉」として理解したのちに、文字を離れて再度聞き取り練習をするほうが効果的であると筆者は信じている」とする。さらに映像を利用した学習の効果として、「中国の地理・歴史・社会・習俗・文化・中国人の価値観・感情などをありありと目にすることができる」とし、学生同士の作業によることから「他者との協働」についても強調する。互いへの干渉を避ける傾向が強い昨今の学生たちの傾向を考えると、切磋琢磨によって生まれる協働の意味は小さくないという見方である。

一方、間ほか（2012）では教育的効果について、次のようにまとめている。

①新しい形態の語学学習に学生が興味や意欲を感じ学習意欲が向上する。

②外国語のリスニング力・解釈力が総合的に鍛錬される。

③中国・韓国の社会、歴史、文化に対する理解が深められる。

④外国語解釈の基礎となる日本語の表現力が向上する。

⑤共同で字幕制作をすることにより自律性や責任感を持たせ他者との協働の訓

[12] 福岡大学人文学部東アジア地域言語学科（2010：4）参照。

練ができる。

ここでは、上記の指摘と比較してみると、①で学生のモチベーションに触れられているのが特徴であろう。同論文は①から③は外国語映画を利用すれば予想される効果であると述べ、④と⑤に注目している。そして、この作業から一歩進んで言及されているのが「地域貢献」という側面である。映画上映会アンケートで字幕作業は好評を得ており、「教育効果としてなにより貴重であったのは、学生たちが自分たちで作成した字幕を一般公開し、会場では受け付けや案内などで市民との接点を持ち、地域とのつながりを感じえた点であろう」と見るのである。

もとより、大枠において筆者もこれと同様の印象を持つ。しかし一方で、肯定的な側面のみが強調され、さらに、やや抽象的な印象もあり、より詳細な検討が必要なのではないか、という感もなくはない。以下、字幕制作作業によって想定しうる語学教育としての可能性と課題について、筆者が考えるところについて触れておきたい。

4—1 語学的側面

Yasuko Lawrenz（2001）は、英語教育において映画を用いることの有効性として 1）Motivation，2）Non-Verbal Communication，3）Cross-cultural lessons，4）Initiating Topics，5）Authenticity of Language をあげている。映画の教材使用という面では妥当な理解であろう。間ほか（2012）で示された効果（モチベーションや、社会・歴史・文化への理解）と共通する面もうかがえそうである。ただし、モチベーションはそのまま語学力向上の期待に直結するとは限らず、また、実際に語学力向上にどのような効果があるかは再考の余地がある。例えば松野（1987）は映画やテレビなどを用いた授業は学生たちが退屈しないはずの授業であるが、積極的な授業参加を保証するものではないと

する。さらに資料は若干古いが、吉島（1987）による東京大学でのアンケートによれば英語受講者の関心事として映画・演劇をあげた学生が多く、教材の希望としても音声教材が上位にあるものの、実際に英語学習で効果があったと思われる学習法では英語のテレビ・映画の活用は最下位圏である[13]。台詞を繰り返し聞くことによる「記憶への定着率の高い」[14] 字幕作業という形式ではあっても、モチベーションの維持の点でそれなりに教員の配慮や工夫、激励が必要となることは意識すべきなのであろう。

ちなみに、授業の一環で字幕制作を取り入れている中国コースでは当該科目に当然に学生は出席をするし、またアンケート結果でも満足度が高いものではあるが、課外活動としての字幕作業となると年によって異なるが、のべ人数で本学科在籍学生の 10％程度の学生の参加である。これを多いと見るか、少ないと見るか、アルバイトやサークル活動などに追われる学生たちのことを考えると微妙であるが、いずれにせよ本学科での作業が単なる映画観賞ではなく字幕制作を通じた新しい形態の語学学習であることへの理解に併せ、学生たちと字幕作業に取り組むにあたり、どういう作業を通じて、どういう語学的効果を考えうるかの具体的な検証、それについて学生たちとどれだけ共通認識を得られるかということなどがより積極的な取り組みを促す基礎となるのではないかと思われる。

リスニング・解釈力が鍛錬される、ということについても慎重を期する必要はある。例えば、リスニングに関連して、映画を活用したディクテーション演習が、音声認識力などの能力の向上には有意に作用するが、内容理解力を含めた総合的なリスニング向上には有意に作用しないとの見方もある（角山：2008）。「話す場合は、語彙や構造の面において自分の英語力の範囲内で操作が可能であるのに対して、聞く活動ではそのような枠組みの限定ができない。話

[13] 菊池（1996：171）でもこれについて言及されている。
[14] 福岡大学人文学部東アジア地域言語学科（2010：6）の間の見解による。

し手の用いる語彙や構造は聞き手の解読能力をこえるものであるかもしれないし、話し手の英語の変種（variety）や発話の速度のために、聞き手の解読作業が疎外されるかもしれない。また、話題についても、話し手は回避しうるが、聞き手は受容せざるをえず、聞き手の立場は話し手よりも困難となる」（岡：1983）というごく素朴な視点からも、90 分から 120 分程度の 2 ～ 3 本の映画を通じて「リスリング」力の向上や語学の総合的な鍛錬を図ることができるというのは実質難しい面があろう。

臨機応変な「リスリング」力養成にはやはり限界があり、むしろ、1）限定的ながらも場面を通じた対話パターンや常用的な表現の習熟、2）非言語的要素まで含めた多様なコミュニケーションの理解、3）日頃教室で学ぶことの少ない하게体、卑俗語、家族間の会話、上司と部下の会話といった待遇法などの学習、4）音声認識力の向上、5）映画の主題や背景に関連する語彙や知識の吸収、ということになるのではないかと思われる。普段聞き流していた映画の台詞への関心の喚起という面もあろう。映像を繰り返し集中して見ることから、それぞれの効果は小さくない。間ほか（2012）の「解釈力」というのはやや漠然として分かりづらいが、提示されたことばの理解そのものはもちろん、ことばの用いられた状況までも理解するということでいえばその通りで、上記の点から、映画の字幕作業が一定の有効性があるのはたしかであろうと思われる。

4－2 社会・文化的側面

古い時代の映画を扱えばそこに当時の時代相・生活相が反映されるのは当然想定されることで、映像を通じてこれらに台詞とともにリアルに触れることは学生たちにそれなりに有意義な意味を持ちうるものと思われる。筆者が学生たちと字幕制作作業をしながら感じられたのは、考えていた以上に学生たちがこの点に大きな関心を見せていたということである。また、はじめはつまらない映画に思えたものが、繰り返し見るうちに見えてくるものもあるようで、学生

たちから「もうこの映画は飽きた」という類の態度やことばは聞かれず、むしろ奥深さがよく分かったという意見をしばしば耳にした。この部分にさらに力を入れる必要を感じるが、字幕作業だけでも教員に相当の負担が伴い、背景学習は作業の合間に適宜口頭で説明するにとどまらざるをえないのが実状である。

4−3 日本語力の涵養

字幕は翻訳というより要約である（太田：2007：15）と字幕制作者が述べるように、字幕制作は日本語力が問われる作業である。しかし、数本の映画字幕だけで「日本語の表現力が向上する」と言えるのであろうか。たしかに互いの切磋琢磨を通じて表現力が磨かれる側面もありうるであろうが、おそらくは日本語力そのものの向上がすぐに見られるとは考えにくく、それよりは日本語の豊かさに対する「気づき」ということが学生のメリットになるのではないかと推測される。それは逆に言えば、朝鮮語への新たな「気づき」にも結びつきうる。ちなみに、経験的に言えば、教員１名につき、学生は４名程度で一緒に字幕を作成するのがやりやすかった。学生たちから積極的に意見が出やすく、気を抜くこともできない人数がこの程度ではないかと思われる。課外活動では、筆者の場合は、１クラスで４名ということを念頭において有志を募った。授業の一環として行う時はグループ別に作業を行って教員がとりまとめて指導する形になるが、これは中国コースで実践されていることである。

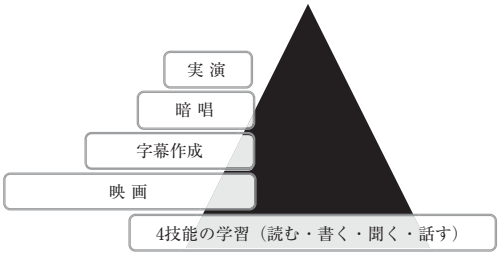
4−4 他者との協働

日頃話したことのない学生同士、学年を超えて意見を交わす作業になるだけに、字幕制作作業に参加した学生たちはそれぞれに団結して作業にあたり、達成感も得ることができたようである。ただ、韓国コースの場合は、継続して参加した学生が限られており、必ずしも積極的な参加は得られなかった。4−1

で触れたモチベーションの問題は、ここでも問題となりうる。合宿での作業に参加した学生は大いに達成感を得た印象は受けた。

4－5 複合的教育

筆者は、映画字幕作業を、語学教育としては「調味料」のような側面があると考えている。学科には語学を学ぶために文法・講読・会話・作文などを意識した授業が設けられているが、これに付け加える形でうまくこの「調味料」を役立たせるのが望ましい。総合的な教育の一環、ということになろうか。授業の中で扱う時には、CM、短編映画、アニメなども対象になろう。実際に中国コースの授業では短編アニメに字幕を付ける作業を行っている。学生たちに好評のようである。しかし、他の授業とのバランスが必要となることであろう。過度に多くの時間を字幕作業に傾けることで、言いたいことを相手に伝える発話者としての外国語力養成や、じっくりと文献講読に取り組む学習との間で不均衡を与えるようなことは望ましくない。さらに言えば、よく知られる dale（1964［改訂版］：42－56）の「経験の円錐」の基準から見ても映画そのものでいえば多感覚による具体性は高くない。映画に加えて字幕を取り入れてはいるが、さらに暗唱・実演を取り入れるなど、複合的な取り組みを同時に行うことで具体的な語学体験に近づくことができるものと思われる。これについては、本学科中国コースの甲斐教授が字幕作業を課す授業のしめくくりに暗唱による実演を取り入れることを試みられているのが効果が期待されるところである[15]。



図—1 抽象性の高いものから具体性の高いものへ

[15] 間ほか（2012：769-770）

5. 作成された字幕

以下、参考ということになろうが、筆者がこれまで字幕制作を学生とともに行った3つの映画のうち、まずは『青春双曲線』（韓瀅模監督：1956年）から3シーンを抜き出し、それを対象に字幕作業を通じて感じた点などを簡潔に示しておくこととする。残る『三等課長』（李奉来監督:1961年）と『運命の手』（韓瀅模監督:1954年）については、紙幅の関係から、2作品をまとめて同じく3シーンのみ、筆者が印象深かった点について触れておくことにしたい。以下、字幕表には映画のどの部分に該当するかの映像時間を付し、スポッティングの長さ（例えば01:16であれば1.16秒）（A）と韓国語の台詞（B)、作成した字幕（C)、字幕ソフトの自動設定（1秒につき4文字）の文字数をオーバーした台詞の文字数（D)[16]をそれぞれ配列した。

5−1『青春双曲線』（韓瀅模監督：1956年）

この映画は歌謡映画、あるいはミュージカル的な要素を有する独特な作品であり、1950年代の作品としては異色な作品である。ストーリーは単純で、裕福な家の男性・プナムが贅沢が原因で胃を病み、その友人・ミョンホも逆に貧しさから胃を病んだことから、医師の勧めにより、それぞれがしばらく家を代わって生活する、というものである。この過程で、二人は互いの妹にそれぞれが惹かれあい、両家が2組の結婚式を挙げるに至る、というものである。釜山を舞台としているが、設定が避難民ということであってか、映画に方言は一切出てこない。韓国では映画において方言はまだこの時代には定着したものではなかったとも言えそうである[17]。朝鮮戦争が休戦状態に入って間もないころのコメディ映画という点でも注目できよう。

---

[16] 映画の字幕を読むにあたり、観客の人々が無理なく読むことができる適切な文字数はおおむね1秒間に3文字〜4文字程度である。筆者はこれを4文字と設定した。
[17] 映画における方言の問題については、第1回上映会のパンフレット作品解説で筆者が簡単に言及したことがある。東アジア地域言語学科（2010：17）参照。

1）映像時間　00:02:45:15－00:03:26:25

A	B	C	D
01:16	간호원들, 오늘은	皆 今日は	
01:17	약쑥이나 좀 정리해라	薬草を整理しといてくれ	4.7
00:21	네	はい	
02:26	에이, 덥다 덥네그려	ええい 暑い 暑いわい	
04:00	젠장, 닥터 김도 코리안 타임이요？	まったくドクター金も コリアンタイムかい？	5.0
03:05	다방에서 몇 시간 기다리게 하는 거요？	喫茶店で何時間待たせる？	
03:13	송도는 가는 거요, 안 가는 거요？	松島は行くのかい 行かないのかい	1.3
02:11	그러잖아도 지금 막 가는 길이요.	出かけるところだったんだ	2.5
02:25	자, 갑시다－갑시다, 가지	さぁ 行こう　－行こう	
02:19	오늘은 밤늦게 돌아올 테니	今晩は遅くなるぞ	
01:13	알았어？－네	いいな？	
02:12	선생님, 저희들과의 약속은？	先生 私達との約束は？	1.4
02:24	오라, 깜박 잊었네	おおっと そうじゃった	
01:23	홍선생, 예	洪さん　－はい	
01:27	내가 좋은 것을 보여드릴게	いい物をお見せしよう	2.4
01:02	잠깐만…	まぁ どうぞ	1.7

映画の冒頭部分である。語学学習としての字幕制作にあたって重要なポイントとなりうるものとして、「3. 字幕作業の実際」で、①適切かつ簡潔な訳、②状況に応じた表現への気づきと習熟、③学生の自主性の確保、④映画に関連する様々な事がらの理解などをあげたが、この冒頭部分を含め、大なり小なりこれらは字幕作業全般にわたり、常時意識されることになる事項であろうと思われる。さしあたり上記のシーンを対象に、これらの側面について、ごく簡略に見ておくことにする。

適切かつ簡潔な訳は、この冒頭部分はかなり苦労した部分であった。規定の

文字数の限界を超える部分が続出した。「그러잖아도 지금 막 가는 길이요.(直訳［以下同］：そうでなくとも今ちょうど出かけるところだ)」の「出かけるところだったんだ」は2.5文字のオーバー、「젠장, 닥터 김도 코리안 타임이요？(クソっ、ドクター金もコリアンタイムかい？)」の「まったくドクター金もコリアンタイムかい？」にいたってはほぼ直訳で5文字分のオーバーである。意訳にも限界があると判断した。せめてもの対処として、後者の台詞は少しでも見やすく字幕を2段組にした。一方で「잠깐만（ちょっとお待ちを)」を「まぁどうぞ」としたのは、場面の状況に応じて意訳したものである。

状況に応じた表現への気づきと習熟については、卑俗語、呼称の問題、待遇法（下称に併せ中称的に用いられた「－요」）への配慮をした。例えば、卑俗語で言えば「젠장（クソッタレ程度の意)」を「まったく」とした。この台詞は映画を通してくり返し登場するもので、映画に独特なリズムとメリハリを与えている側面もあるように感じる。この台詞は下品に過ぎないように、あえて「まったく」で統一した。呼称の問題としては、「간호원들（看護師たち)」「홍 선생（洪先生)」をどうするか、という点もある。これらは、この場面ではそのままに訳出すると日本語として妙なものとなる。それぞれ「皆」「洪さん」とした。待遇法や語調を意識したものとして「오라」「덥네그려」「－요」などをうまく登場人物の性格や年齢などにあわせるよう表現を工夫した。

学生の自主性の確保については、それなりに注意を払った。例えば「오늘은 밤늦게 돌아올 테니（今日は夜遅く帰る予定だから)」という台詞は一見簡単そうに見えるが、文字数の制限を考えると決して単純ではない。複数の意見を出し合って合意を得たのが「今晩は遅くなるぞ」であった。こうしたわずかなセリフにも5分あるいは10分と時間がかかるのが普通である。「약쑥이나 좀 정리해라（薬用ヨモギでもちょっと整理しておきなさい)」というのは「整理」ということばの状況判断が難しい。ここでは直訳調ではあるが、「薬草を整理しといてくれ」とした。少々不自然な気もしたが、これ以上に明瞭にするのは

難しく、学生たちも話し合う余地がなかったようで、これを妥協点とした。とことん話し合う時は１つの台詞に何 10 分もかかり、ときには複数回の作業でそれを何度か再検討するなどもした。後者のような場合など、意見が提出されなければ比較的あっさりと即決する場合ももちろんある。

映画に関連する様々な事柄の理解については、このシーンについて言えば松島に注目できそうである。台詞を提示しながら、学生たちに松島についてごく簡単に説明した。この映画では松島海水浴場が全編を通じて重要な空間となっている。筆者の知識はいたって少ないものであったが、松島海水浴場の地理的な位置、現在の様子といった程度の情報であっても、それを念頭に置きながら映画に接することは、韓国について学ぶ学生たちにはそれなりに印象に残るものとなったのではないかと思われる。

こうした各事項が意識されることは次のようなシーンにおいても同様であるが、以下からは筆者にとって興味深かった点や筆者の考えなどについて、簡略に触れる程度にとどめておきたい。

2）映像時間　00:08:18:19－00:09:43:15

A	B	C	D
02:20	아이고, 아이고, 이건 또 누구야？	おっと 今度は誰だい	
01:09	미안합니다	すみません	
01:08	선생님 안녕하세요？	こんにちは	
01:18	응, 자네는 또 웬일인가？	どうした？	
01:08	위가 아파서요	胃が痛くて…	
02:00	몹시 쑤시고 쓰려서요	ひどくキリキリと	
02:23	오늘은 전부 위 아픈 날인가？	今日は胃が痛いデーか？	
03:00	자, 저리 가 누워 보게－네	そこに横になって　－はい	
03:09	여보게, 내 배도 좀 봐주게	おい　わしの腹も診てくれ	
02:16	배고파 죽겠네！	飢え死にしちまうぞ！	

02:06	정반대인데	正反対だな	
01:09	정반대라니요？	何がです？	
02:17	이번엔 위가 오그라들었나？	今度は胃が縮んだ？	
03:17	위확장과 반대니까 위협소증이라고 할까？	胃拡張の逆で 胃狭小とでも言うか	0.7
01:22	그런 병도 있습니까, 선생님	そんな病気が？	0.1
02:16	결국 위염 수치가 적거나	胃酸の数値が低いとか	
01:20	위가 활동을 너무 심하게 하면	胃が活動しすぎると	2.3
03:21	젠장, 실향민들은 죄다 그 병에 걸렸겠군	失郷民は皆 その病気になっちまうな	1.2
03:16	영양만 충분히 섭취한다면 자연히 낫겠는데	栄養さえしっかり 摂れればなぁ…	

この部分で筆者が興味深く思ったのは学生たちの奇抜な発想である。「오늘은 전부 위 아픈 날인가？（今日は皆、胃が痛い日なのかな）」を「今日は胃が痛いデーか」としたのは学生のアイデアである。筆者には思い浮かばない訳であった。コメディ映画であることから、こうした字幕も許容範囲とした。一方で、教員としてはたとえコメディであってもことばの訳し方によって作品が必要以上に軽くなり過ぎたり、あまりに意訳が行き過ぎたものとなったりすることは避けたい。とりわけ卑俗語には気を使った。基本的に卑俗語が出てくることがあったとしても可能な限り作品の品位を落とさないという意識が必要であるように思われる。「胃狭小」という病名をどうするかにも少々悩んだ。直訳で問題があるとは思えないが、一旦は、それが実際にどういった病気であるのかを調べる必要はある。しかし、筆者が調べた限り、胃の狭小という現象は存在するが、この映画の説明に該当する病気として特別に「胃狭小」に類する病名があるわけではなさそうである[18]。直訳以外の選択肢は考えにくいが、フィクションとしての病名がやや気がかりにはなった。また、「失郷民」ということばは

[18] 筆者がこの字幕作業を行っている時期に医師に質問して確認したところによるものである。

筆者の予想以上に学生たちになじみの薄いことばであったようである。これについても学生たちに簡単に説明をした。大韓民国における「失郷民」の組織や名節における国境付近での祭祀など、学生たちとしては韓国の現実と歴史を知る一つのきっかけとなったように思われる。

次の部分は、1950 年代のダンス文化をうかがわせるシーンである。貧しいミョンホがプナムの代わりに裕福な家庭に住み、プナムの妹・ミジャと交わす対話である。

3）映像時間　00:41:30:16－00:42:45:08

A	B	C	D
03:00	오빠는 식후에 댄스도 하시는데요	兄は食後にダンスもするの	
02:00	댄스요？－그럼요	ダンス？　－ええ	
02:13	명호 씨는 오빠와 똑같은 생활을 해야	兄と同じようにしないと	1.3
02:08	병이 낫잖아요	治らないんでしょ？	
03:23	이 댁은 요리집에다 다방에다 댄스 홀까지 겸하셨군요	お宅は料理屋と喫茶店 ダンスホールまで…	2.0
01:15	그게 나쁜가요	それが何か？	
03:26	아뇨, 외국에 온 거 같아서 말입니다	いいえ 外国に来たみたいで	
02:19	국민문화도 높아가야 되지 않아요？	国民文化も高めないと…	
04:21	참, 댄스 하실 줄 아세요？－모릅니다	ダンスはお出来になる？ —いいえ	
02:15	좀 알으켜 주시죠？	教えてもらえますか？	
02:15	댄스를 모르시다니요？	ダンスをご存じない？	
01:08	구식 선생님이신데	お堅い先生	
02:12	저는 구식을 좋아합니다	僕は古い人間なんです	0.4

1950 年代における韓国のダンス文化の一面をうかがわせる。朝鮮戦争を経たばかりの韓国において、こうしたダンス文化は奢侈そのものであり、風刺と

しての視角をここにうかがわれないこともない。西洋の物を好んで用い、遊興にふけるミジャの生活は、当時の庶民の暮らしとはかけ離れたものである。しかし、当時、こうした文化が全くなかったわけではないのもまた事実である。ダンス文化については同じ韓瀅模監督『自由夫人』（1956 年）でもその一端をうかがうことができる。朝鮮戦争が休戦して間もない時期にこうした娯楽映画が発表されたことは、学生たちは意外な印象を持ったことであろう。一方で、あえてこうした映画を撮った韓瀅模監督のハリウッド的な傾向とそこからの影響、あるいは監督がこの時代にあえて示した映画の娯楽性の意味など、考えるべきことは多い。なお、「구식 선생님이신데（旧式の先生でいらっしゃいますこと）」「저는 구식을 좋아합니다（僕は旧式が好きなんです）」という台詞を「お堅い先生」「僕は古い人間なんです」としたのは学生たちであったが、見事な訳であったと思われる。このように筆者が思いもよらなかった台詞が学生たちから出ることは少なくなかった。学生たちは教員たちの示唆を受け入れ、それを消化し反芻しつつ自分のことばにして、こなれた表現をさらに模索する、という感じであろうか。

学生たちの意見を尊重するのは、じつはなかなか難しいものである。サポート教員としてご協力くださった李秀炅先生のご意見もうかがいつつ、全員で意見を出し合う。本作品の字幕は最終的には筆者が全体を微調整しているが、基本は学生たち自身による訳が中核をなしている。

90 分の作業でできる字幕は映像で 10 分ぶんに満たない場合が多かった。しかも、それを 2 度、3 度と見直すのである。学生たちは所々、台詞を暗記するようにもなる。また、この作品で多く用いられる「하게体」も、積極的に参加した学生は、自然と耳になじんだことであろう。映画という限られた枠組みではあるが、様々なコミュニケーションのあり方に接し、1950 年代の空気をそのままに原語で映画に触れられた体験は、学生たちにはおそらくは記憶に残るものとなったのではないかと思われる。

すでに触れたように、筆者の理解では、字幕作業は外国語力や日本語力の向上という点ではそれなりの限界があり、むしろ４技能の基本的な学習を前提とし、それに加味する複合的・総合的な学習の取り組みにより、その効果が大きく膨らむものと考えるが、いずれにせよ、学生たちが真摯に字幕作業を行えば行うほどに、習熟と気づきが多くあることに間違いはないものと思われる。教員のやり方と学生たちの気持ち次第で、その実りは大きいものにも、小さいものにもなりうることであろう。

この映画に字幕を付けつつ、興味深いことはかなり多かった。訳としては歌を歌いながら通り過ぎる男が歌を褒められて「열 두 가지 재주 가진 놈이 밥 먹을 재주 없다는 게 바로 이거지요.（12 の才能を持った者が飯を食う才能がない［筆者注：諺］というのがまさにこれですよ）」と言うところは筆者としては頭を抱えたところであったが、「歌を歌えたところで飯を食うのに何の役にも立たんですよ」との訳が出てきたときは皆でなるほどと膝を打つような感があった。また、映画を観ながら気づいたこととして、水泳のできない者を韓国では「맥주병（ビール瓶）」と呼ぶが、映画では「사이다병（サイダー瓶）」とされているのも筆者自身としては興味深いことであった。貧しい登場人物が「판자집（あばら家）」という表現にはさほどの拒否感はなく、「하꼬방（ハコ家）」と呼ばれることに不快感を見せることも当時の現実の反映であろうか。現代とは異なる生活器具や食事も学生たちの目を引いたことであろう。父親が北朝鮮に拉致されたとの台詞や、あばら家の街に住む貧しい芸術家の存在なども時代を感じさせる。若干苦労したのは、映画が古かったために音声が聞き取りづらかったことである。

5－2『三等課長』（李奉来監督：1961 年）と『運命の手』（韓瀅模監督：1954 年）

以下では、『三等課長』と『運命の手』を対象に、筆者が学生たちと作業し

ながら印象深かったシーンを3か所のみ簡単に紹介しておく。字幕作成作業を通じて学生たちとどのような対話や文化的・歴史的な教育の可能性がありえたのかの一端をかいま見ることもできるのではないかと思われる。

まず、『三等課長』は1960年の4·19革命後に撮られ、1961年に封切された。これは激しいデモにより李承晩が下野し、第二共和国憲法の成立と張勉による民主党政権の誕生の時期、つまり1961年5月16日の朴正熙少将による軍事クーデターの直前に該当する。かろうじて「自由」が映画の中に組み込まれえたころの作品である。同時期の作品に兪賢穆監督『誤発弾』が知られる。5・16軍事クーデターの後、『三等課長』『誤発弾』はともに公開が中止となっている。一方、『運命の手』は朝鮮戦争の停戦後まもない時期に封切されたものである。この映画は北朝鮮からの女性スパイを扱った作品であるが、智異山でのゲリラ戦に見られるように、朝鮮人民遊撃隊のパルチザン活動は韓国内において進行中のものにほかならなかった。この作品は米国からの機材輸入による戦後（朝鮮戦争）の映画復興期に作成された作品でもある。前者は李承晩政権の直後という点において、後者は朝鮮戦争休戦直後という点において、それぞれに時代の転換期に該当する、という見方が可能であると言えよう[19]。

『三等課長』からは2つのシーンを紹介しておくことにしたい。

1）映像時間　0039:39:11－00:40:24:15

A	B	C	D
02:29	이제 정말 놀고 먹는 것도 귀찮아졌어	遊ぶのにも　もう疲れた	
01:09	영화구경도 그렇고	映画にも	
02:20	아르바이트도 별로 자극이 없고	バイトにも刺激がない	
02:15	정말 무슨 사건이나 안 날까	事件でも起きないかな	

[19] 各作品の紹介として、第2回および第3回上映会報告書である、間・熊木（2011・2012）に筆者による上映会当日パンフレットの作品解説を収録している。

02:24	한 번 속 시원하게 데모나 하면 되잖아	デモでもしてみたら？	
02:11	그것도 이젠 지쳤어	もう疲れたよ	
03:06	결국 남은 건 계집애하고 노는 거밖에 없단 말이야	あとは女と遊ぶぐらいだな	
03:01	아유 , 저게 입을 가졌다고 못하는 소리가 없네	口だけはご立派ね	
01:09	먹는 자유 ,	食べる自由	
01:11	말하는 자유 ,	話す自由	
02:21	이것이 입의 자유야	これが口の自由だ	
03:25	입의 자유를 막는 자 누구냐	口の自由を 妨げる奴は誰だ	
02:05	정말 한국은 너무 좁단 말이야	韓国は狭すぎる	
00:28	정말	本当に	
01:16	정말 좁단 말이야	本当に狭い	
01:21	돈이 없으니 좁은 거지	お金がないからよ	1.2
03:07	돈만 있어 봐 얼마나 넓은 나란데	お金さえあれば とても広い国よ	1.1
01:15	그것도 그래	それもそうだ	

筆者は上映会のパンフレットにこの映画の解説を書くにあたり、題名を「お喋りな映画『三等課長』」としたことがある。それほどに、この映画は台詞が多い。内容は人情と愛情をテーマにしたホームドラマであるが、所々にこの時代の影が映し出されている。もとより、途切れることのない台詞が、まさに閉塞した時代からの開放感を代弁しているかのようでもある。その中で、上記のシーンは印象的である。父の働く会社に就職し、旧世代の父と共に働く主人公の女性・ヨンヒの兄・ヨングは、4·19 革命を誇らしく語ると同時に、全てに疲れたと言って遊びまわる人物でもある。自分たちの世代で成し遂げたはずの 4・19 革命ではあったが、それによって失業率回復の見通しや政治的な安定、あるいは外国からの援助が積極的にあったわけでもない社会的・経済的な不安定感が、背景

に映し出されているように見える。

このシーンでヨングはデモにも疲れたと言い、一方で自由を謳歌しつつ「狭い韓国」という国を嘆くのである。ここで字幕作成後の参加学生たちのアンケート回答を２つのみ引用しておくことにしたい。

・『三等課長』はセリフ数が多くて韓国語のリズムがとても好きでした。4・19革命など当時の社会背景も描かれていて、勉強になりました。（3年生･T さん）
・ちょっとした会話にも実は、当時の韓国の社会背景を反映しており、限られた時間と字数で、年代も国も異なる人を対象に表現する難しさを実感しました。しかしながら、そういった何気ない生活に社会を風刺する面白さが韓国映画の魅力であり、長編の字幕作業を楽しくできた秘訣だと思います。（4年生・O さん）[20]

学生たちの関心が決して「訳」にのみ向かっているわけではないことが、ほんのわずかな数のアンケート結果しかないもののうかがうことができそうである。

次のシーンは、学生たちとの対話がかなりはずんだ部分である。

2）映像時間　00:40:50:27－00:41:43:02

A	B	C	D
02:05	아, 이거 두 마리에 5천환이야？	2匹で5千圜（ファン）？	
02:04	이건 그래도 싼 거예요, 어머니	安いほうですよ	
02:15	한 마리에 5천환짜리도 있는 걸요	1匹5千圜（ファン）もあります	
03:11	어…맛은 있겠다마는 원 너무 비싸다	おいしそうじゃが 高すぎる	

[20] 間・熊木（2011：157）

03:22	아, 이 사람아！ 산 잉어를 어떻게 먹어？ 아깝게	おい… せっかくの鯉を食べる？	
01:27	두고 감상을 해야지	鑑賞せんとな	
02:08	여보, 어떠우？	どうかしら？	
04:19	이런 걸 가져 간다고 얼마나 효과가 있어？	こんなのを持って行って 効果があるか？	
04:03	다 이래 둬야 이번 인사 이동엔 틀림없이 당신이 과장 자리에 오르게 될 게 아니에요	課長になるには こうしておかないと	
02:10	아니, 어디 갖고 갈 거냐？	誰かに渡すのかい？	
02:14	네, 송 전무님 댁에요	専務のお宅です	
01:02	오, 그래！	そうかい	
05:10	난 또 먹으려고 샀나 했지 그러면 그렇지 그럴 리가 있나？	うちのものかと思ったけど そりゃそうだね	
05:19	저 송 전무님 사모님께서 일전에 잉어 얘기를 하시지 않아요 그래서 사가지고 왔어요 어머니	奥様が鯉の話をなさったので買ってきたんです	
03:08	어…즉 사바사바를 하려는 거로구나	つまり ワイロを渡すんだね	
03:09	아유 어머니두… －다사바사？	お母さんったら… －カイロ？	

このシーンでは、歴史的な面として貨幣としての「圜（ファン）」というものの存在をまず説明する必要があった。1953 年の緊急通貨措置により、韓国では 100 圓（ウォン）が 1 圜（ファン）となったのであった。1962 年にふたたび通貨は圓（ウォン）へと戻る。当時の貨幣制度や物価高、また「賄賂」の文化まで含めてうかがうことができ、興味深い。この場面における「사바사바（賄賂）」ということばも面白い。これは現在では用いられない当時の流行語である。上の字幕だけでは話者が誰であるかは分かりづらいが、ヨンヒの父、母、祖父、祖母の 4 人のやり取りである。「사바사바（サバサバ）（賄賂）」として専務に贈られる鯉を見て、ヨンヒの祖父がそれを聞き取ることができず、祖母に「다사바사（タサバサ）？」と聞き返す。この台詞に学生たちは「ワイロ」と「カイロ」をかけて訳をつけた。こうしたセンスはやはり学生たちが

優れている。文化的には、鯉を賄賂として渡すというのも学生たちには意外であったようである。食用として渡すというイメージが鯉にはなかったからである。しかし、これは普段の食事に供されるものであるというよりは栄養補給の面が強いものであった。日本でも食用に用いられることがあるものではあるが、ほぼ見かけるのが難しい食材ではなかろうか。こうした意外な発見があることが映画の魅力の一つなのであろう。

最後に『運命の手』から１シーンのみを抜き出しておく。

3）映像時間　01:07:56:22－01:11:43:08

A	B	C	D
01:27	영철 씨	英澈さん	
04:07	화류계 여자가 무엇이 나쁘오？	花街の女の何が悪いんだ？	
04:22	한 사람의 고학생이 굶주리고 헐벗고 있었을 때	苦学生が空腹で 着るものもなかったときに	
04:13	그것을 아무 조건도 없이 도와준 당신의 아름다운 마음이	手を差し伸べてくれた あなたの美しい心が	1.2
04:02	왜 신의 찬양을 못 받는단 말이오	神の称賛を受けられないはずはない	
02:05	무엇이 괴롭소？	何がつらいんだい？	1.3
03:04	무엇이든지 내 힘으로 될 수 있는 일이라면	どんなことでも力になれるなら	1.5
01:20	내 도와 드리리다	僕が力になる	
01:07	제가	私が	
04:24	선생님을 사랑했다는 것이 죄겠죠	あなたを愛したことが 罪だったのでしょう	
03:23	선생님은 저를 구해주실 수는 있어요	あなたは私を救うことはできるわ	
01:14	그렇지만	だけど…	
05:10	저는 선생님께 구함을 받을 자격이 없어요	私にはそんな資格なんてないの	
02:24	왜 자격이 없단 말이오？	なぜ資格がないんだ？	

04:17	서로 사랑하고 있는 남녀가 왜 서로 결합될 수 없단 말이오？	愛し合ってるのに結ばれないなんて	
03:03	38 선은 왜 생겼는지요	38 度線はなぜあるの？	
01:05	그렇소	そうだな	
02:20	뜻하지 아니한 38 선 때문에	38 度線なんかのせいで	
05:12	우리는 피차가 이러한 고통을 받고 있는 것이오	みんな苦しんでいるんだ	
02:29	그러나 가능한 한	でも可能な限り	
05:17	우리들은 우리들의 손으로써 이 장벽을 뚫고 나가야 하오	自分たちでこの障壁を乗り越えなければ	
02:15	뚫고 나갈 수는 없어요	そんなことできないわ	
03:16	그것은 꽉 막히고 말았어요	乗り越えることなんて…	
01:12	선생님	ねえ…	
02:25	지금 제가 말씀드리는 고백을	今　私の告白を	
02:15	들어주실 수 있겠어요？	聞いてくれますか？	
03:20	제가 말씀드리는 고백을 들으시고	私の告白を聞いたら	
02:16	깜짝 놀라실 거예요	驚くでしょうね	

すでに触れたようにこの作品は朝鮮戦争が停戦になってまもない時期に撮影・上映されたものである。北朝鮮の女性スパイと、韓国のそれを取り締まる側の部局員とが恋に落ちる物語であるが、同じ民族が戦争で戦わなければならなかった悲惨な体験から１年ほどしか経っていない時期ということを考えると、かなり果敢ともいえる主題であったと言えるのかもしれない。おそらくは南北間での恋愛を描いた嚆矢とも言える作品ではないかと思われる。現代の私たちの目から見るといささか仰々しいシーンの多い映画ではあるが、パルチザンが現実として存在していた当時としてはそれなりにリアリティのある映像であった可能性があることであろう。映画の技術としてみると、照明の工夫に優れており、カメラのアングルにも配慮が行き届いている。筆者の印象では、当時の映像としては、それなりに見どころのある作品である。

さて、上のシーンは北朝鮮のスパイでありつつ花柳界に身を置くマーガレッ

トと、苦学生に身を扮した韓国側の取り締まり部局員・英澈（ヨンチョル）との対話である。韓国語の台詞と字幕を比べれば分かるように、台詞の内容の核心と感情を、制限された文字数の中に効果的に収めるのにかなりの工夫が凝らされている。例えば、「무엇이든지 내 힘으로 될 수 있는 일이라면（どんなことであれ、僕の力でできることなのであれば）」「내 도와 드리리다（僕が助けてあげよう）」という部分は、「どんなことでも力になれるなら」「僕が力になる」とこなれた訳となっている。また、呼びかけの「선생님（先生）」という台詞を「ねぇ…」とした箇所もある。この作品では「선생님（先生）」という呼称が場面に応じていくつものことばに訳し分けられるのである。このシーンは、筆者の印象ではかなりうまく感情をも字幕に移しかえることができたのではないかと考えている。学生たちの悪戦苦闘の成果である。

上映会のパンフレットに寄せられた、参加学生のことばを引用しておきたい。

「なんだ、この映画は……」

「下書き」字幕の付いたこの映画を見た私の最初の感想です。よく意味の分からない演出、コメディのようなクスッと笑ってしまうオーバーな演技や言葉（説明）足らずに思えるセリフの数々、見る前に先生に「朝鮮戦争直後の時代を反映している映画」という説明がなければ私は 90 分間、何の映画かさっぱり分からないままだったと思います。

（中略）

作業が進むにつれていつの間にか映画の中により深く入り込んでいく自分がいたことに驚くと同時に、実際に行われている映画の字幕作成の難しさを感じました。

特に私が難しいと感じたのは「言葉（説明）足らず」に思えるセリフの数々を短く、かつ少ない会話の中で繰り広げられる物語をどう自然に、分かりやすく字幕にしていくかということでした。

作業の中で当時を生きる彼らが何を感じ、考えていたのかを十分に理解し、その気持ちをセリフに組み込むことは字数に制限があったり、直訳とかけ離れてしまったりと随分と試行錯誤を繰り返しました。

しかし、こうした作業を繰り返し行ったことで違和感を覚えた「オーバーな演技」や「意味が分からない」演出を理解し、またタイトルでもあり、キーワードでもある『運命の手』とは何なのか……。そういう細かい部分にも演出の奥深さを肌で感じると同時に38度線を境に激動の時代を生きた彼らがきっと抱いただろうやりきれない気持ちや何を思い、生きていたのかをこの映画を通して考えさせられました。（2年生・S君）[21]

参加学生たちは、映像と台詞に向き合うことによって、その時代を生きた人々の感情までをもくみ取り、それを字幕に込めようとした。参加者全員が字幕の素人であるだけに未熟な作業ではあったろうが、授業でおもに扱う4技能（読む・書く・聞く・話す）や文化的・歴史的知識だけでは味わえない人間の感情への洞察までも意識して作業を行った部分もやはり確実にあるのであり、この点は「語学学習の手段の広がり」として充分に有効な意味を有する可能性があるものと思われる。映像を利用した学習により、「（中国の：筆者注）地理・歴史・社会・習俗・文化・中国人の価値観・感情などをありありと目にすることができる」[22]との見方に通じるものであるが、「目にする」ことにとどまらず、字幕作業を通じてその感情の深淵にさらに一歩自ら入り込む意味が考えうる、ということである。間がすでに言及した部分のうち、「映画鑑賞という受動的・消極的受容を能動的・積極的受容に変えること」[23]がまさに字幕作業での学生た

[21] 間・熊木（2012：147）。なお、「下書き」とあるものが、熊木ゼミの演習で作業を行ったり有志が研究室で打ち込んでくれたものであることは先に触れた通りである。
[22] 福岡大学人文学部東アジア地域言語学科（2010：6）における間の見解による。
[23] 福岡大学人文学部東アジア地域言語学科（2010：6）参照。

ちの学習における根幹であり、作業の成否にも関わりうる点となるのではないかというのが筆者の印象である。

6. おわりに

映画字幕作成作業は、語学教育として「総合学習の一環」としての有効性をそれなりに認めることができるものと思われる。さらに、すでに先行研究で強調されてきたように地域貢献、大学教育の社会的貢献という点でも一定の意味を有する。一方で、外国語・日本語力の向上という点で一定の限界は必ずしもないわけではないし、教員側の立場からすると、作業をどのような手続きによって行うかにもよるが、それなりの負担も発生することは避けられない。対時間効果、対費用効果などの課題を並行して考える必要があることであろう。授業で扱う場合と課外で扱う場合のやり方も異なってくるはずである。筆者としては字幕作業においては文化的・歴史的背景までを含んだ人間の感情への洞察を作業の核心として注目したい。映像と台詞を通じてその時代に生きた人間を見て、息吹を感じること、それこそが語学教育としての字幕作成の重要な魅力の一つとなりうるのではなかろうか。映画をただ見ているだけではとらえきれないものが、字幕制作へと集中する中で感情や感覚としてことばとともに入り込んでくるものがある。いずれにせよ、バランスよくカリキュラムや学科行事を編成し、今後も様々な形の語学教育の実践を模索して、学科において試みて行くことにしたい。

（本稿は平成 25 年 3 月 23 日（土）九州産業大学で行われた朝鮮語教育研究会第 57 回例会話題提供での発表用のレジュメに大幅に加筆したものである。）

【参考文献】

Edgar Dale（1964［改訂版］）『Audio-Visual Methods in Teaching』、Holt, Rinehart and Winston

Yasuko Lawrenz（2001）「Issues to Consider in Using Modern Films in Language Teaching」、『大阪女学院短期大学紀要 』31、大阪女学院短期大学

岡秀夫（1983）「口頭技術における伝達能力―発話の機能を中心に―」、『大学英語教育学会紀要』14、大学英語教育学会

角山照彦（2008）「映画を活用したディクテーション演習の効果について―映画教育における日本語字幕の影響の有無と今後の課題―」、『英米文化』38、英米文化学会

松野和彦（1987）「大学における英語教育」、『言語文化センター紀要』第 8 号、東京大学教養学部附属言語文化センター

吉島茂（1987）「第二次「外国語の学習に関するアンケート」の集計報告」、『言語文化センター紀要』第 8 号、東京大学教養学部附属言語文化センター

菊池俊一（1996）「英語教育における英語字幕付き映画の可能性」、『沼津工業高等専門学校研究報告』第 30 号、沼津工業高等専門学校

太田直子（2007）『字幕屋は銀幕の片隅で日本語が変だと叫ぶ』、光文社新書 292

福岡大学人文学部東アジア地域言語学科（2010）『地域共生 地域貢献 福岡大学人文学部東アジア地域言語学科の取り組み―中国・韓国映画に日本語字幕を付ける―』、平成 21 年度福岡大学「魅力ある教育」「理論的・実践的『地域』教育プログラムの総合的構築」報告書

間ふさ子（2008a）「字幕ソフトを使った中国語教育について」、『福岡大学研究部論集 A：人文科学編』、Vol.7 No.5、福岡大学研究推進部

間ふさ子（2008b）「中国映画『五朶金花』の字幕翻訳―新しい語学教育法を考える―」、『福岡大学研究部論集 A:』Vol.8 No.3、福岡大学研究推進部

間ふさ子他（2012）「字幕制作を使った語学学習（中国語）の構想と実践」、『福岡大学人文論叢』Vol.43 No.4、福岡大学研究推進部

李秀炅他（2010）「映画字幕作業を通じた学生への語学教育の試みについて―第 2 回東アジア地域言語学科学生有志による字幕作成成果上映会を中心に―」、『福岡大学言語

教育研究センター紀要』9 号、福岡大学言語教育研究センター
間ふさ子・熊木勉（2011）「第 2 回福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会について」、『福岡大学研究部論集 A: 人文科学編』、Vol.11 No.2、福岡大学研究推進部
間ふさ子・熊木勉（2012）「第 3 回福大生による東アジア映画字幕制作・成果発表会について」、『福岡大学研究部論集 A: 人文科学編』、Vol.12 No.3、福岡大学研究推進部